

ウルメイワシ *Etrumeus teres*

目が大きく、脂脰（しけん）と呼ばれる透明な膜でおおわれているため、潤んだようにみえることからウルメイワシと呼ばれます。県内では単にウルメと呼ぶほか、幼魚をタバコ、ウルメゴ、特大魚をテッポウウルメと言うこともあります。丸干しに加工されるほか、新鮮なものは刺身やつみれでも美味です。仔魚はシラスとしても利用されます（シラスの項参照）。



生物特性

高知県で漁獲されるウルメイワシは太平洋系群に属し、主に西日本の太平洋側に分布します。本種は、同じいわし類のマイワシやカタクチイワシと比較すると、暖海性で回遊範囲が狭いと考えられています。そのため、産卵量から親魚の分布状態を推定することができ、ウルメイワシ太平洋系群の分布の中心は、土佐湾であると考えられています。産卵期は10月～翌年7月と長期にわたり、産卵盛期は2～7月と11～12月です。いわし類の中では成長が速く、1年で被鱗体長約21cmに達します。寿命は約2年と考えられていますが、鱗の年輪による年齢査定の結果では、3歳以上の長寿魚も確認されており、条件によっては長生きする場合もあるようです。

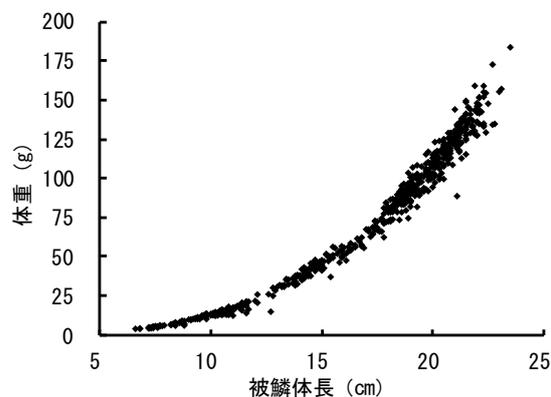


図1 高知県産ウルメイワシの被鱗体長と体重の関係（平成23～27年の測定データに基づく）。

資源動向

ウルメイワシ太平洋系群の資源水準は、平成15年（2003年）以降増加傾向にあり、平成19年（2007年）にピークを迎えました。平成20年（2008年）は一時的に減少しましたが、その後は高い資源水準を維持していると考えられています。平成27年の資源量は18万トンと推定されており、平成28年度の資源評価では、水準は「高位」、動向は「増加」とされています。

県内の漁獲動向

高知県内におけるウルメイワシ水揚量は昭和 63 年 (1988 年) 以降増加傾向にあり、平成 23 年 (2011 年) には 5,757 トンのピークに達しました (図 2)。これは、先に述べた太平洋系群全体の資源動向とよく一致します。主に宿毛湾のまき網と、県内各地の定置網により漁獲されます。また、土佐湾では多鈎釣漁が盛んです。

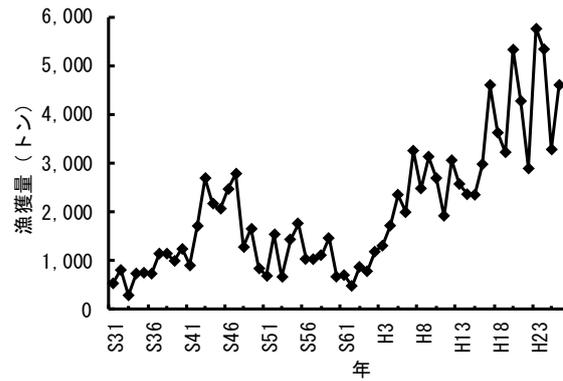


図 2 高知県におけるウルメイワシ漁獲量の推移。

宿毛湾の中型まき網では、ほぼ周年漁獲されますが、1~2 月には少ない傾向があります。定置網では 4~12 月に漁獲されます。定置網、まき網とも、5 月、8 月及び 9 月に水揚量が一時的に落ち込む傾向があります (図 3)。一方、主に土佐湾内で漁獲される多鈎釣では、12 月から 3 月の冬季が盛漁期となっています。しかし、1 日 1 隻当たりの水揚量 (CPUE) をみると、水揚量の少ない夏季も、一定の数値を保っています。これは、丸干しの原料としての需要がほとんどであるため、加工に適した冬季に多くの船が漁獲するため、魚が漁場からいなくなっている訳ではないと思われま。

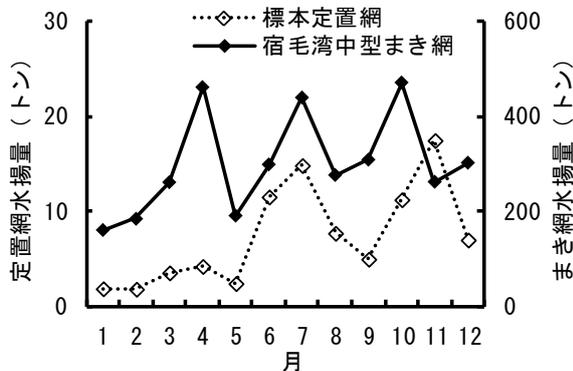


図 3 標準定置網と宿毛湾の中型まき網によるウルメイワシの月別水揚量 (平成 18~平成 27 年の平均値)。

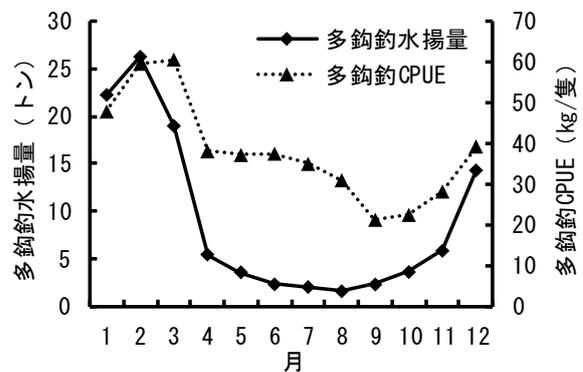


図 4 宇佐漁協の多鈎釣りによるウルメイワシの月別水揚量及び CPUE (平成 18~平成 27 年の平均値)。

春になると、その年生まれのウルメイワシ 0 歳魚（5cm 程度）が定置網やまき網の漁場に参加し、成長しつつ漁獲されます。同時に、前年生まれの 1 歳魚も漁獲されます。夏になると 1 歳魚の多くは寿命となり、姿を消します。その後は、0 歳魚が成長しながら漁獲され続け、翌年春の漁へとつながっていきます。そのため、宿毛湾の中型まき網では、ある年の上半期における 0 歳魚の加入状況から、その年の下半期の漁況を予測することができます（図 5）。

しかし、近年では 0 歳魚が獲れはじめる時期が遅くなる傾向があり、予測が難しくなりつつあります。

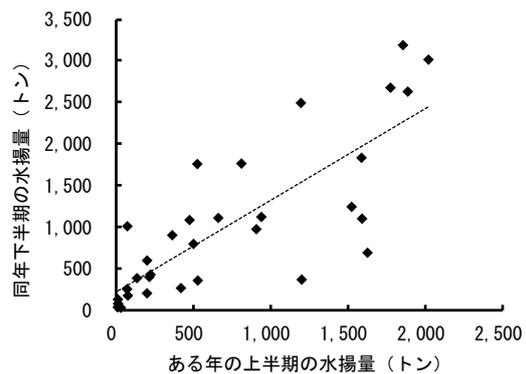


図 5 宿毛湾中型まき網の、上半期のウルメイワシ水揚量と、同じ年の下半期の水揚量の関係。上半期の水揚量が多い年は下半期も多い傾向がみられる。